

千年に渡る不可侵協定を竜族側が破ったことで始まった戦争は、開始半年を経て膠着状態に陥っていた。両陣営ともに甲民間わす多大な被害が出ており、早期決着を求む声が庶民の間から上っている。しかし、開戦当初に双方が行った非道な踊る舞いから生じた憎しみの連鎖により、戦争終結の目処は立っていない。

俺の村は開戦当初に竜族の奇襲によって滅ぼされた。母も妹も穴という穴を犯された後、時間をかけて食われながら死んだらしい。俺は偶然、深山の森へ狩りに出ていたため難を逃れることができたが、運が良かったなんて思えない。その後すぐに軍に協力して村の奪還に貢献し、竜族への恨みを晴らしたんだ。

竜族は単体での戦闘能力も高く、魔力も侮れない。従って、捕虜にはせず皆殺しが常識だ。だが、俺は最後に発見した竜族の牝を殺さなかった。俺が母と妹の最期を知ることができたのは、この牝を尋問中に、得意気に自分達の戦果を語ったからだ。

俺はこの竜族の牝に、母や妹以上の苦しみを与えてから、処分してやりたかった。生きてることを後悔させてやりたい…。

軍の指揮官は俺の功績と憎しみの感情を慮ってくれ、特別に竜族を捕虜とすることを認めてくれた。竜族の体力魔力を低減させる効果のある魔方陣を張った部屋に、この牝を監禁して俺の復讐が始まる。

成人向

竜族の娘

あれから一年が経った。もちろん、まだ竜族の牝は処分していない。というのも、この牝が俺の、人間の子を孕んだからだ。竜族は自分の子供を人間の比ではないくらい可愛がると聞く。それが全滅させたいほど憎んでいる人間との子であっても、変わらないのか興味を沸かしたからだ。種がなんであれ産んだ子を可愛がるのであれば、タイミングを見計らって何度でも処分してやる。人間との子を孕み産むことが最高の屈辱であれば、子供製造機として孕ませ産ませまくる。どちらにしてもこの牝は酷く苦しむだろうな。楽しみだ。



「今度こそ産みたい?ずいぶんとワガママ言うようになったじゃないか」
俺は顔みの感情を隠さず竜族の娘に微笑んだ。
「どんな扱いをされても又句が言えない存在のくせに、要求だけは人並みか…
だったら、人並みの態度を取ってもらおう」
少し間をおいてから、俺はできるだけ御機なく竜族の娘に命令を下した。
「これからは、人間のペニスが大好きな変態で淫乱な竜族の娘になってもらおう」

いつになっても慣れない手つきと口の使い方。
口先だけの忠誠と正直に反応してしまう体。
大きく勝らんだ腹を上下させ、懸命に奉仕の
真似事をする竜族の娘を俺はいつまでも嘲笑うのだった。

24

慄かに逃げ延びた村人たちが少しずつ戻ってきて、ようやく村にも活気が出てきた。
知も徐々に回復し、武器商人ではない普通の行商人も訪れる。
諦めていたはずの普通の穏やかな生活を取り戻すことができるなんて…。

しかし、あの苦しみを忘れてはならない。
だからこそ、今年の収穫祭では捕らえていた竜族の娘の一人を皆の前に晒すことに決めたのだ。



烏竜族の娘は王族格の竜族の闘士で、戦闘能力はあまり高くない。
とはいえ敵ではあったので即刻処刑対象だったが、この日のために甲に特別に生かしておいてもらったのだ。
憎しみを力に変えて復興を遂げた村人たちがより一層の団結を得るために…。

飛竜族の中でも風変わりな部族の娘を捕らえることに成功した。
一度は連中に制圧された谷を我々人間達が奪還したことを知らなかったようだ。
直接、彼女に被害を受けたわけではないが、向こうがその気になれば人間なら即死しかねない
威力の高い放電を行うため、危険な存在であることには変わらない。
つまり情けをかける道理はまったくないのだ。




狭く薄暗い小屋の中で、餌を与えられる代わりに奉仕させていると、あっという間に孕んでしまう。
妊娠すると乳房の張りが増し、肉付きがぐうと良くなるのがこの部族の特長らしい。
自らの立場に屈辱を感じて涙しても、いやらしく成長じた肉体は性欲処理を拒まない。
吸い付くようにペニスから精液を搾りとっていき、
怒り時に放たれる危険な放電現象も、阿重にも封印を施されたこの小屋では放つことはできない。
ここで妊娠と出産を繰り返すうちに、そんな気性も少しずつ和らいでいけよう。
もし、治らなければ処分するだけの話だ。
果たしてこの娘はどちらになるのか…。

どんなに苦しい世の中でも物好きはいるもので、うちの村に王都から学者が派遣されてきた。なんでも、竜族を専門に研究されているそうで、村にいるのを見てみたいとのこと。俺はまず最初に、まだ多少は正気が残っている飛竜族の娘の元に学者を連れて行った。

「ほほお〜これはこれは…かなり良い状態で保存されているようで、一目見ただけで、学者はご機嫌になった。うちの村の竜族監禁技術は田舎とは思えないくらい高い水準にあるようで、ちょっと誇らしい。」

「なるほど…魔力と膂力を固体及び安置している部屋に施して…粗野だが理に適っている」
学者は飛竜族の娘の大きく丸まった臀部を膝で回しながら呟いた。
「お試しになりますか？こいつもガキを孕みはしましたが、なかなか良い具合ですよ？」
竜族の娘は憎い敵ではあるが、性処理道具としては素晴らしい。
これだけは認めざるを得ない点なのだ。
「いえいえ、今日はそれには及ばないよ。おや、この娘は先走っておるようだが…淫乱な下種よのお」
「はい、まったくもって下種な奴らです」
俺は手持ちの鞭で飛竜族の娘の全身を打ちまくった。
叩かれる度に娘の肉棒からは臭い液体がほとぼる。
「こいつらは鞭打たれて感じるような、色狂いなんですよ」
王都の学者を前にして、興奮状態の俺は思わず叫んでしまう。すると、
「ふむ…水を差すようですまんが、これは感じているだけではないぞ。怒っておるのじゃ」
なんとも変な笑みを浮かべてつつ、学者はズボンを下ろし始めた。
「どうやら、我慢できなくなつたらしい。」
「じっくり堪能して下さい。何日でも村に居てくださって結構ですから」

その後、この学者はうちの村に住み着いたことは言うまでもない。



もうすぐ麦の収穫が始まる季節だ。
うちの村でもっとも時間を持て余す時期ではあるものの、
天候次第で収穫量が変わってくるので毎日が気が気でない。
本来なら長く退屈な夜が続くわけだが、今は王都から滞在している学者先生が
毎晩楽しい話を聞かせてくれる。
いつの頃からか夜になると、村のみんながこの研究室を訪れてるようになっていた。

今夜は王都で最近流行っているペットの話だ。
ペットというと犬や猫くらいしか俺らには思いつかないが、
王都では、「鳥」が人気らしい。

七色に輝く羽を持つ鳥竜族の娘、それも幼ければ幼いほど人気らしい。
見た目もちろんだが、幼い七色鳥竜族の娘は、ある特殊な性質があるという。

話の先をやや勿体ぶる学者先生の機嫌を取ろうと、村の子供達が酒とつまみを運んできた。

動物には大抵、どんなことにも周期がある。
特定の時期にのみ繁殖を行うのはその最たるものだろう。
この七色鳥竜族も例外ではないのだが、幼いモノのみ、出産時期が決まっているのだ。
つまりその時期がくるまでは、受胎後出産を待つことなく、次々と妊娠していく性質があった。

これは同族同士では繁殖期が決まっているため、短期間に何匹も胎内に子供を宿し、
安全な時期に一度に出産することで、種族の繁栄を図っていると考えられる。
しかし、王都で我々人間にペットとして飼われ、飼い主によっては性処理にも使うようになると、
出産期になるまでは妊娠し続けることになる。

王都の連中は、この多重妊娠した七色鳥竜族の娘の腹の膨らみ具合を眺めているらしい。
市の立つ目の広場は、ペットを連れ来た多くの人たちと見物人でごった返すそうだ。

その話を聞いた子供達が王都に行きたいと駄々をこね始めた。
学者先生は少し興ざめた表情を見せると、子供達に船を与えてお開きとした。
大人達は話を聞いた興奮ですぐに眠れそうにないので、皆、思い思いの小屋に赴き、
捕らえている竜族の娘を相手に長い夜を過ごすのであった…。

復興した村から半日の距離にある街の守備隊が全滅した。相手はたった一匹の竜族らしい、とは街から避難してきた行商人の話だ。その竜族はゆっくりとだが確実に、この村を目標している。もちろん、村は騒然となった。一匹で街の守備隊を殲滅させられる竜族といえば、古竜族しか考えられないからだ。竜族から奪還したいきさつもあって、この村にも街クラスの守備隊が配されている。だが、古竜族は一匹で城砦を滅ぼす存在なのだ。

逃げ支度に備える村人、とまかできることを為そうと武器の手入れを始める守備隊、再び祭りが始まると勘違いしてはやく子供たち、再び村を失うなんて俺には耐えられない。ともかく、何か方法はないかと村から少し離れた場所にある学者先生の家を訪れる。身の回りの世話をさせている少女からおおよその話を聞いていたらしく、学者先生は身支度を済ませている。先生も村から離れるのか、と俺は落胆した。だが……心配はいらない。守備隊の隊長を呼んで用意して欲しいものがある。要点のみを淡々と伝えながらも、学者先生は俺に希望の光を与えてくれた。

捕らえた竜族は古竜族ではなかった。その攻撃力、破壊力は古竜族に引けをとらないほど凄まじいものらしいが、猪突猛進することしか頭にない。単細胞で、学者先生の指示で巧妙に配置作成された落とし穴に面白いほど引っかかったのだ。やがてスタミナを失ったところを捕らえ、その力を封印した。

双角竜族の娘は一旦村から街に護送され、街の人々から正当な制裁を受ける。そのまま街で肉俵器になると思われたが、単細胞だけでなく気性も非常に荒く街では手に負えないし、引き受け手もないということで、俺の元へと送り返されてきた。

何時の頃からか、学者先生の勧めもあって、俺は竜族の娘を人間が飼えるように調教することを生業にしている。今は双角竜族の娘が相手というわけだ。

力そのものは封印の効果もあって、問題ないのだが、その激しい気性には手こずった。鞭打ちなどの体罰や角の一本を折ったくらいではまるで怯まない。快楽によって有めようにも、双角竜族は他の竜族よりも獣に近いらしく、性交はあくまで交尾であり、快楽という概念を持たないことがわかった。

しかし、さすがに今回はお手上げた、と学者先生に話していた矢先に変化がでてる。

どうやら腹に宿した子供だけはいとわいらしい。そういえば、飛竜族の娘も子供に対する愛情は強かった。禁一本で胎児を始末できると話してからは、少なくとも表面的にはこちらの命令に大人しく従うようになり、好みにもよるが喜んで飼ってくれる人間が出てきてもおかしくはない。

とはいえ、このまま引き受け手を探して譲るつもりは毛頭無かった。まずは亡くなった守備隊の人たちやその家族に対して償いをさせるのだ。

俺は双角竜族の娘の出産予定日にあわせて、遺族達を村へと招待した。きっと俺の招待とイベントに遺族の方々の心痛も少しは和らぐことだろう。

……出産後、

一ヶ月以上にわたって村に双角竜族の娘の咆哮が響き渡る。

招待に応じてくれた遺族の方々は大変、満足してくれた。全ての遺族を招待する必要もあるし、これをあと二三回繰り返せば、双角竜族の娘も少しは大人しくなることだろう。

うちの村の北西部に広がる黒い森には、朽ち果てた塔が建っている。
村が竜族に襲われるまでは、王都からきた物好きな学者が肝試しに子供達が訪れるくらいで、ひっそりとしていたらしい。
しかし、竜族にこの塔の存在を知られてからは、懐しい日々が繰り返されている。
学者先生の話によると、竜族がうちの村を襲った目的はこの塔の確保にあるという。
大切な何かがあるのかと、竜族を撃退してから何度も調査に赴いたが、成果はまるであがらなかった。
村と異なり、竜族にとって重要でも人の住まないこの塔に警備隊を置く余裕はないので、
俺と学者先生とで工夫をこらした民を調査に訪れるたびに設置しておいた。
そして、何度もかの調査の際に、一体の竜族が捕獲されたのだが…。



「これまでに捕獲・研究した竜族とは桁違いの魔力、体力ですわね。この村に腰を据えたのは正解でしたわ」
妖艶、ともとれるうっとりとした表情で、村にいる学者先生の一人が呟いた。
「雷角、とても表現すればいいのかしらね。ここに物凄い魔力がこもっていると考えるのが普通だけど…」
「迂闊に切断なぞすれば、村ごと消滅しかねんわい」
学者先生の中で最年長の方が、物騒なことをさりと言う。俺は冷や汗を自覚しながら、これまでの研究結果を報告する。
「古龍族と確定できた理由として…」

「……これまでに捕獲・調査した他の竜族と比べて、体力で五倍、魔力は十倍以上と【古竜族】と呼ばれるだけのことはありますわ…でも、戦闘能力だけを比較してもつまらないでしょ？」

妖艶且つ残酷そうな笑みを浮かべ、なぜか頬を紅潮させながら学者先生の二人が解説を続ける。

「そこで同時期に飛竜族、鳥竜族、甲殻種の三体と一緒に強制種付けの実験を行ったの。五日で臨月状態になるよう調整し、出産後ただちに再種付けを行ってどの程度まで妊娠し続けられるか調査してみたわけなんだけど…」

通常の竜族は子供に対し異常なまでの愛情を示す。子供のためならば、例え我々人間相手であっても奴隷や肉便器になることを厭わない。それは出産前であっても同じであり、しかもその種の出自は問わないほど子供を慈しむ。魔達が憎き竜族をすぐに殺したりせず生かしておくのは、この性質のお陰で安全に研究できるからだ。

「たった三ヶ月で他の三体は心身ともに壊れちゃって実験が続けられなくなっちゃったわ。特に生まれてくる幼体は五日ってこともあってかもう酷いものよ。あんまりヤワなのがむかついたんで、三体とも意識を失う寸前にこれまで産んだ子達を目の前で処理してやったんだけど、その時の取り乱しよと云ったら最高におかしかったわあ」

町を興った竜族によって両親と姉の夫を惨殺され、自分と姉、幼い姪達が半年以上犯されたという過去を持つ学者先生（姉と姪は途中で息絶えたがそれでも犯され続けたいらしい）にしてみれば、せめて半年は実験体にも持って欲しかったに違いない！

「…ごほん…それで古竜族はどうだったんじゃ？」

竜族への恨みは魔や他の学者先生の比ではない長老格の学者先生が落ち着き払った様子で説明を続けるように促した。もちろん竜族に同情しているのではなく、話の脱線を嫌がっただけだ。

「それが……まだ実験は続いておりますの」

古竜族の牝は五日ごとの受精、出産に耐え続け、しかもいまだに押猛な精神を失っていない。妊娠中にも何度となく犯してみたのだが、こちらを早く射精させることで追い払おうと考えているのか、野獣そのものの性交で終わってしまう。とにかく「変わらない」という印象を魔は強く持っていた。

「……一番驚いたことは、出産のたびに魔力が強くなっていることですよわね。二ヶ月を経過した段階で通常の封魔処置では制御できなくなりましたから…僅てて都から専門の先生をお呼びして大掛かりな封陣儀式を施さなくなりました。封陣が完成してからも、その維持のために甲に借りができてしまったくらいです…」

「よく費用が捻出できましたな…いくら都から目置かれている実験とはいえ…」

「今、この村はベット・奴隷用の竜族の一大生産地ですから、お金はなんとでもなりますよ？」

「しかし、結果の出せない実験は意味がないぞ。拷問がしたいだけなら自分で竜族を飼えばいい」

この報告を聞いた学者先生達の多くは落胆していた。古竜族と聞いてかなり期待してたのだから。長老格の先生も、何人かいる女性の先生方もその反応を甘んじて受けていた。

「あの…学者先生方を前にして恐縮なんですけど…魔も少し話をしてもよろしいですか？」

「機会は今しかない。村を興った竜族の奴隷をこの世から消し去るための第三步を踏み出すために。」

「この古竜族の面白い使い方に気づいたのですが…」

奥付 竜族の娘 発行のざらし 発行者 野晒屋
発行日 2008年5月4日
連絡先 nozarasi_s@mail.goo.ne.jp
HP <http://www.seri.sakura.ne.jp/~domo/g18c/>